

校則の指導を必要とされる現場での生徒との関係作り

公立高校 若田希望

1、はじめに

今の学校に来て2年目。1年目は2学年の担任、2年目の現在は3学年の担任である。学校は全日制の普通科で、担当学年の生徒は1年次から3年次までに約70人退学している。欠時がきれたり、生徒指導によって転退学をしていたり、年度終わりに単位が取得できず進級不可で転退学する。いわゆる言うことを聞かない生徒に対して厳しく、どんどん排除していくことは「学校を守る、真面目な生徒を守ること」という考えが蔓延しており声の大きい教員や生活指導部主任・学年主任もそのような考えである。生徒に向かって「この学校のルール守れなかったら違う学校にいけばいい」や「もっと自由にできる学校あるよ」と声をかける教員は多い。

2、Sが4月初めに身だしなみ指導に引っかかる

Sという生徒がクラスにいる。Sは4月入学式後の生活指導部による身だしなみチェックでつけ爪がひっかかった。その場で期日までに外してくるように生活指導部から指導され、私もそばにいて一緒に期日を確認した。

期日になっても外してこなかったの、生活指導部の教員と理由を聞くとSは「ほかにもつけている生徒がいる。去年まで何も言われなかったのになぜ今年になって言われるのか」といった。生活指導部は「他につけている生徒はいない。全員同じ指導をしている。去年までも校則ではダメだったことには変わらない。」といい、お互いの話は平行線であった。Sは「だったら学校をやめる」といった。私はあわてて「3年生まで頑張ったのに、やめてほしくない。身だしなみを整えて授業に参加してほしい」と伝えた。Sは「別に頑張って3年生になったわけではない。何も努力しなくてもここまでこれた。学校辞めたい」と繰り返した。さらに「つけ爪をとるお金がない」というので生活指導部の教員は「4月の3週目まで期日をのぼす。そのかわりそれ以後にも外してこなかったら再登校指導になる」といい、Sは「できるかわからないけどそれで。別に学校に来なきゃいいんでしょ」といって立ち去って行った。保護者に電話連絡をし、保護者は「はずさせます」といい、「すみません」と学校に対して申し訳なさそうな態度をとった。私は自分の不甲斐なさで再登校指導に疑問を持っているので、保護者に対して申し訳ない気持ちになった。「こちらこそすみません」といって電話をきった。

3、Sと私の年度初め関係

その後Sとは話す機会が何回かあった。年度当初のHRで学級レクを行い、ちょっとした景品として白いアルフォートをクラスの生徒に配ると、放課後Sが私に近づいてきて「アルフォートは青いのが一番おいしいよ」と言ってきた。そこからどんなお菓子がおいしいかと

いう話になった。また「小さな子の面倒を見るのが好きで、折り紙したり絵を描いたりするのが好きだ」と言って写真を見せてきた。「すごいね！」という「保育関係の仕事に将来就きたい」と話してきたので「いいじゃん」と話した。そして「じゃあ気をつけて帰ってね」という「私は学校の先生とか、大人とかは嫌いだけど、先生は今までの先生とちょっと違うのかなって思ってるよ。でも多分これからいろいろ怒られちゃうと思うからどうなるかわからないけど」と言われた。「そう？これからもよろしくね」といった。それから朝や帰りにちょっとした話「スタバのフラペチーノ何味が好きか」などをするようになった。Sの大人への不信感をぬぐうためにもこうして関係を少しずつ築いていけたらと思っていた。

4、Sと私の関係が崩れ始める

つけ爪をはずす期日の前日、放課後にSに「爪のことだけど月曜日までに外せる？」と聞くと「さっきM先生（生活指導部教員）にもいわれた！しつこい！」と言って帰っていった。

そしてつけ爪を外す期日当日、Sは朝のSHRにいなかった。電話すると「外してないから学校にいけない。どうせ行っても帰らなきゃいけないでしょ」と言ったので、「どうしても外すことはできないの？学校の授業があるからそれに出てほしいよ」というと「無理」と答えた。電話をいったんきり、生活指導部にいき「外してないみたいなんですけど、学校に来て再登校指導になりますか？」と聞くと「再登校指導になる」との回答だった。「このまま休みが続くことが心配だ」と言ったが「他の生徒も同じようにしているので。」と言われた。

こうして結局Sは4月24日～5月9日まで休んだ。その間は本人に電話しても電話にでなかった。Sにはクラス内にYとIの二人の友人がいた。Yは真面目でSの面倒を見るようなタイプだったのでYにSと連絡を取ってもらったが「Sは学校やめるっていつてるよ」といっていた。5月8日には保護者と電話したが、保護者も「どうすればいいのかわからないんです。意地はっちゃって。」と答えた。私は生活指導部にいき「Sはやめると言っています。保護者もすごく困っているようです。授業の欠時が増えていきます。学習権を保障することが重要だと思います。つけ爪で退学するとなったら大変なことになりませんか。再登校指導続けますか？」と言った。生活指導部は「管理職と相談します」と答えたが結局様子見をつづけることになった。この時生活指導部や管理職に強く言うことはできなかった。へりくだってということしかできなかった。私は生活指導部の先生に「Sがご迷惑おかけして申し訳ないです。」など必要以上に言っていたと思う。

5月10日、Sは爪を外して朝のSHRにいた。全く外す様子がなかったので正直驚いた。「やるじゃん！生活指導部に見せにこようよ」と言ったが本人は全く表情を変えず返答もなかった。私と物理的にも距離をとってきた。ここで少しずつ築いてきた関係が壊れたことを実感した。

5、私がSとの関係を壊す

Sはその後学校に来ていたが、授業態度が悪かった。私語をするわけではないが、フードをすっぽりかぶり机に突っ伏して50分過ごしていた。同じ学年の英語教員Yは「Sはいつも寝ているし、ピアスも外さない。反抗的な態度だ。」と私に言ってきた。私の所属する学年団は英語教員Yの声が大きい。英語教員Yはいわゆる身だしなみ指導を徹底して行うタイプで、特にピアスの指導に対して厳しかった。私は身だしなみに関しては指導したくないし、指導するのはおかしいのではないかと思っている。しかし、学校の求められる役割に当てはまる自分もいる。自分のやりたくないという考えと学校の求められる役割のはざまで、式典や集会時だけはピアスをはずすように声をかけ、授業時や休み時間は指導しないというスタンスをとっていた。ましてやSに対してはまた関係を作るところから始めたいと考えていたためピアスの指導は行っていなかったが、そうした私の対応のあいまいさや矛盾をSは感じ取っていたのだと思う。

英語教員Yは私の担当学級で授業をするたびに「Sはまたピアスを外さなかった。何も言うこと聞かない。さらに6組はSだけが授業態度が悪いわけじゃない。真面目だったHも寝ていたりする。6組雰囲気が悪いです」と報告してきた。自分も自分のクラスで授業をしているが、英語教員Yが言っているほどやりにくさを感じていなかったのも私は英語教員Yの問題だろうと内心思っていた。だから報告が何回もくるたびにクラスやSに対して何もアクションは起こさなかった。私が何も手立てをしないので、英語教員Yと6組の関係はよくならなかった。そして英語教員Yによる6組のダメ出しは日ごとに増していった。そこから暗に自分の担任としての指導力がないことを毎日のように責められていると思うようになり英語教員Yに対して私はかなりストレスを感じるようになっていた。

英語教員Yは私が聞き流していることにいら立ったようで、私に聞こえるように他の教員に「6組は授業がやりづらい。先生は6組やりづらくないですか？」と話すようになっていた。私は本当にこれには参ってしまい、いらいちを隠せなかった。そしてそのイライラのまま、ある日担当する政治経済の授業を6組で行うこととなった。

Sは私の授業時も何も机の上に出していなかったのも教科書をロッカーから持ってくるように言うとしぶしぶとってきた。その時、耳にピアスがついているのが見えた。いつもはスルーしているが、英語教員Yに言われたことなどもあって「ちゃんとさせないと」という気持ちが強く出た。「ピアスはずしてね」と声をかけたが全く外すそぶりがなかった。そこでイライラした私は「授業がすすめられないよ。」と声をかけ全体の授業をストップした。すると、Sは教室の外に飛び出していった。私はあわてて巡回している教員に事情を説明した。Sは玄関に座っているところを巡回している教員に見つかり職員室の小部屋に連れてこられていた。

授業が終わって職員室に戻ると学年主任がSと話をしていた。「どうしても今日はピアスをはずせないらしいです」と私に報告してきた。学年主任は「次の授業は教室にもどしましょう」と言ってきた。Sは学年主任の先生とニコニコしながら話していた。ピアスを外さな

くても教室に戻していいなら私は毎日のように何を指摘され、私は何のために注意したのかわけがわからなくなった。そもそも私自身も指導したくない内容なのに、学年主任がいいというならもういいじゃないかという気持ちにもなった。そこに英語教員 Y も授業終わりに職員室にやってきて学年主任の話をきいて「ピアス外さないなら教室に戻したらダメ」と言った。学年主任はすぐに方向転換をし、結局ピアスをはずすよう説得することになった。

私は S のところに言って話をしようとしたが S は「話したくない」の一点張りだった。もうこの時には自分でも何がしたいのかよくわからず、S と何の話をすればよいのかもわからない状態だった。ただ卒業は一緒にしたいという気持ちはあったので、授業を頑張ろうよという話をしたが、S は露骨に私を避けるような仕草や部屋を出ていこうとする仕草をみせた。私が話をするのはこれ以上良くないと考え、学年主任にバトンタッチした。結局学年主任が S と話し、S はピアスを外して教室に戻っていった。学年主任は英語教員 Y に「さすがですね」とほめたたえられていた。私は間を取り持ってくれた学年主任には感謝の気持ちがあったが英語教員 Y の「さすがですね」が私の指導力不足を指摘しているように聞こえてしまい、この日はとにかく疲労といらだちと自分自身が S との関係が今後よくなることはないのではないかという不安でいっぱいだった。

6、私の中の転機、東京高生研の参加

この S を教室から出してしまった事件の数日後に東京高生研があり但馬さんの発表を聞いた。私は但馬さんがご自身のことや悩みをさらけ出している発表を聞いて涙しそうになった（帰り道に一人泣きました。）。悩んでいるのは自分一人だけじゃないという気持ちにもなった。

この発表を聞いて、自分自身の弱さともっと向き合う必要があると考え自分自身との対話の時間をもった。私はいつも周囲の目を気にして、周りの教員に「できる教員」と思われたい、いや少なくとも「できない教員」とは思われたくないという感情がいつも自分にまとわりついていてと思った。

また、私は頭髪やピアスや制服の指導はしたくない（することはおかしい）と強く思っていることも改めて感じた。校則を教員だけで決めており、生徒総会は形だけになっていて生徒の意思決定の最高機関になっていないことも違和感を感じている。民主的な学校運営を行うためには、生徒の意見表明権を確保し、生徒と教員と保護者とが一緒にルールを作り、ルールを見直し、ルールが不必要と考えれば改定できる環境が重要だと考えている。これが自分の教員として大事な事、「正義」だと思っていることなのだと自分自身との対話を通して改めて感じた。

この日から私は「自分ができない教員と思われてもいい。身だしなみの指導よりも生徒との関係作りを重視しよう」と考えた。英語教員 Y の報告も気にしないようにしようと努めた。それよりも S との関係構築を－100 ぐらいからまたスタートさせなければいけないことに集中したいと考えた。関係改善の糸口はないか。試行錯誤する日々が始まった。

7、夏休み中のSとの1対1の授業

Sはその後私と雑談することは一切なくなっていた。関係改善の糸口が全くつかめないまま1学期が終わった。しかし、転機が訪れた。Sは1学期の終わりに単位を10単位落とした。その中には私の担当している政治経済の単位もある。定期考査の点数が一桁代で単位を認めることができなかった。私が教室から出してしまった事件もあったのだからSがテストに取り組む気持ちにならないのも当然のことだった。3年生の1学期に単位を落とした生徒は、進路活動を行うことが出来ないため夏休みに追認するように補習を行うことが学校の規定で決まっていた。Sはしぶしぶ5つの授業の追認願いを提出した。私はここがチャンスだと考え、プリントやレポート課題ではなく、1対1で3日間授業を行うことにした。二人でゆっくり話すことが出来るチャンスだと考えたからだ（私以外の教科はレポートやワーク提出で追認していた）。

授業1日目、2日目とプリントを使いながら啓蒙思想や民主主義について説明した。不貞腐れながらもSは単位取得のために授業に対して真面目に取り組んでいた。3日目の最後の日、小テストを行った。合格基準を満たす8割の点数を取得したので「頑張ったね!」という「別に」と言ったがSから返事をもらえたことはうれしかった。何より勉強してきてくれたこともうれしかった。そして、「授業はここで終わりだけど、最後に少しだけ話しましょう」と声をかけると「何?」といったが、席を立ちあがることはなかったので話ができるチャンスだと考えた。本当は他愛のない話をして雑談から始めたかったが、Sと私の今の関係は雑談ができる関係ではないと考え、実質的に話す必要がある進路の話から始めた。Sの進路の話は1学期の三者面談で大きくこじれていたからだ。

8、Sの進路

もともとSは保育士になりたいという夢があったが、家庭の経済状況が厳しく、母親から三者面談の時に「専門学校に行ってもいいけど、学費や入学準備金などは自分で用意してほしい。」と言われた。Sは少しは家庭が費用を工面してくれると思っていたので「え? ちっとも出してくれないの?」と怒った。そして不貞腐れ「だったら専門学校行かない」と言い始めた。私は奨学金や国の教育ローンの話をして何とか専門学校を目指さないかと話をしたが、「奨学金も国の教育ローンも自分で全部返済しなければいけないのはきつい。特に国の教育ローンはすぐに返済がはじまるからきつい」と話した。私はその面談後、いくら費用が必要で、具体的にどれくらい月々返済していけばいいか表を作ってSに渡したが、その表をちらっとみて「もう行かないからいいよ」と表を机の上において帰っていった。表を作るのに1時間ほどかかったのでくやしさと虚しさがこみ上げた。しかし、その一方で経済状況で保育園をあきらめるSの環境を考えると胸が痛んだ。そしてSの進路は宙に浮いた状態だった。

9、S との進路についての話し合い

補講3日目終了後、この宙に浮いた状態の進路の話をし始めた。「専門学校は本当にもういいの？お金の計算した表もこの前作ったけど何とかやっていけるかもしれないよ」というと「もう本当にいい。フリーターになるよ」と言ってきた。「お母さんはなんて言ってるの？」と聞くと「特に話していない」と言った。「フリーターも悪いとは思わないけど、何か他にやりたいことがあるの？」と聞くと「プロのダーツ選手になりたい」と言ってきた。「ダーツ好きだもんね。プロのダーツ選手ってどうやってなれるの？先生詳しくないから教えてよ」というとSは意気揚々と説明してくれた。聞いた内容は私はほとんど覚えていないが、Sがこの時本当にダーツが好きなんだなということは改めて感じた。そこから「そういえばこの前K先生（隣のクラスの担任）がダーツにいて〇〇点とってたって自慢してたよ」というと「大したことないよ、その点数じゃ（笑）」と笑顔をみせた。Sと久しぶりに雑談ができたと感じた瞬間だった。

その話の最後に、Sのスマホから母親に電話してもらい、今Sと話した内容を伝えた。母親はダーツ選手になることは鼻で笑い「そんなのなれるわけじゃないじゃない」と言っていたがフリーターになることに関しては否定しなかった。「その代わり家にお金をいれなさい」と言い電話をきった。私は「もしまた専門学校に行きたい気持ちがでてきたらその時は教えてね」というと「それはないかな」と言った。そして、他の教科の追認のためのワーク提出日などを確認し「頑張ってるね」と言って終わった。正直このSとの会話に手ごたえを感じたわけではないが、2学期の今Sとの関係が少しずつ改善されつつある現状を考えると夏休み中のこの機会は重要だったのではないかと考えている。

10、2学期のSと私

2学期が始まり、Sとは雑談はできるようになり、電話にも出てくれるようになった。私は2学期になってからSがピアスをつけていても注意しなくなった。ピアスの注意はSとの関係断絶になると考えているからだ。それよりも少しでも話がしたいと思った。

ある日のLHR中に学級で文化祭の話し合いを行った。その時、Sと友人Iが「トイレに行ってくる」と言って途中で抜け出した。Sは手先が器用で、モノづくりが得意なので文化祭は楽しめる機会なのではと私は考えていた。学校は身だしなみの指導ばかりをされるような場所ではなく、楽しめる場所だと感じてほしいと思っていた。しかし、クラスの話し合いの最中に抜けたことでやはり学校に対して前向きではないのだろうなと感じた。SとIがなかなか戻ってこないで私は女子トイレまで迎えに行くことにした。そしてトイレに入るとSとIは鏡の前でポーズをとりながらスマホで写真を撮っていた。私が「もう！文化祭の話し合いしてるんだから教室戻るよ！」という「えーっ、だってやる気ないし」と言っていたが、二人とも本気で嫌がる様子ではなかった。そして教室に戻った。そこからSは文化祭の話し合いに参加し始め「買い出しにいきたーい」と言ったり、お菓子の輪（お化け屋敷を通り抜けられた人用のプレゼント）を作成し始め、意外にも前向きな姿勢を見せ始めた。

文化祭の2日間、Sはずっとクラスの企画の受付をしていた。遅刻してくることはあったが、準備も本番も楽しんでいるように見えた。文化祭が終わった日、クラスで集合写真を撮るときに私はSの隣に並んだ。するとSはすぐさま「先生が隣はいやー」と言ってきた。少し落ち込んだが、すぐさま友人Iが「えっ！私先生の隣がいい！」と腕を引っ張ってくれた。私はIにケアされ嬉しかったが、Sとの関係はまだまだこれからだなと感じた。

最近嬉しいことがあった。卒業アルバムのクラスで自由に作成できるページ欄に使用する写真を集めていた時のことである。Sが私に「先生、この写真絶対卒アルに使ってほしいの。」と言ってスマホの写真を見せてきた。その写真は、文化祭の話し合いの時のLHRでトイレに抜け出したSとIと迎えに行った私が鏡越しに少し移っている写真だった。「ここに先生一緒に写ってるんだよ」と言われ私とSは笑い合った。「それはいい写真だね！絶対使おう！」と言った。その後も、「先生私バイト先で部下26人いるんだよー」や「私あと何日休んだらやばいかなあ」など話しかけてくることが増えた。今は休んだ日に電話をすれば必ず出てくれて「学校おいでよー」って言うのと「はいー」と答えるようになった。卒業までに何とか学校で楽しい思い出を増やしてほしいということと、大人に対する不信感が少しでもぬぐえたらなと思っている。

しかしその一方でまた身だしなみの指導で、そして私の指導の矛盾さや理不尽さでSを傷つけてしまったり、関係が壊れるのではないかと不安に思うことがある。今後どうなるかはわからないが、私は少しSとの関係を自分で何とかしよう、何とかできるはずと思いすぎているのかもしれない。クラス全体の雰囲気は悪くない。文化祭を機にクラスの仲はさらに深まったようにも感じている。もっとクラスのみんなにSとの関係がこじれたら頼ってみよう。今のクラスならSも私のことも助けてくれるのではないかと感じている。

追記 （1～10作成後）文化祭後～卒業まで

2学期の後半、Sの授業態度は以前よりよくなっていった。積極的に取り組むわけではないが、ノートをとったり、プリントに取り組んだり、授業に参加するようになっていた。関係が悪かった英語教員Yも「Sは授業に参加するようになりました」と私に報告してきた。

12月、球技大会があった。Sはこの球技大会はとにかくやる気満々だった。本番前に放課後に体育館を借りて練習したいとクラスメイト数名と一緒に体育科の先生や担任の私に直接お願いしに来た。私は許可し放課後Sたちと一緒にバレーボールの練習をした。球技大会は残念ながら準優勝で悔しがっていたが、私はSがクラスメイトと一緒に中心になって行事に熱中して取り組む姿が嬉しかった。

3学期、身だしなみ指導に引っかかるところからスタートした。つけ爪を冬休み中につけていた。「またあの再登校指導だのなんなのやりとりしなきゃいけないのか」と思うと気が重くなったが、意外にも生活指導部が決めた期日を守り爪をはずした。

そして、Sは1月中旬から保育園でのアルバイトをはじめた。私にアルバイトに必要な提

出書類をどうしたらいいか聞いてきたので「保育園でのアルバイトするんだ！」と声をかけると「保育の実務経験を積んで、試験を受けて保育士の資格を取るんだ」と言ってきた。金銭的な面で進学を諦めざるを得なかった時、進路に対して投げやりになっているようにも見えた彼女だったが、自分なりに出来る方法を模索し、保育士になるために頑張っている姿に感動した。保育園でのアルバイトを始めてからは本当に生き生きしているように見えた。

勤務校は3年生は2月初旬に学年末テストが行われ、それ以降は卒業式まではほとんど学校に登校しない。卒業式前日の予行の日。腹痛のため欠席したSに電話をかけた。卒業式の日に登校時間や持ち物を確認した後、念のため「髪の毛は染めたりしてないよね？」と聞くと「保育士は髪の毛染めれませんからね」と笑いながら答えてきた。自分は保育士なんだという誇りをもちアルバイトを頑張っている姿がこの電話からも感じ取ることが出来て嬉しかった。

卒業式当日、式が始まる前に時間があつたのでそれぞれが思い思いに過ごしているとSが「先生、リボンつけて！」と近寄ってきた。制服のリボンがうまく襟の根元まであがらないので私につけてほしいと頼みに来たのだ。Sの首元に手を回すとSが私の腕のところにあごを置いてきた。子どものように甘える姿が愛おしかった。いろいろなことがあって関係が崩れたときは卒業式にこんなことが出来るようになるなんて夢にも思っていなかった。最後のHRが終わり挨拶をした後、「先生、バイバイ！」と言い明るく去っていったSに「うん！保育の仕事頑張ってね！」と声をかけた。

11、振り返ってみると…

私はこれまでいつも「校則」に悩まされ、「あるべき自分」と「こうせざるを得ない自分」の葛藤に悩んでいるのではないかと考えた。もともと中学校の教員を10年間していたが、その時から高校の教員になった今も「校則」問題は自分の中で大きな悩みであることに今回この報告を書いているときに改めて思った。私は校則が不必要と思っているわけではない。校則自体は必要だと考えている。しかし、生徒の人権侵害にあたるような校則もあると感じており、そのことについては指導したくないと考えている。特に頭髮・ピアス・制服の着こなしに関することは表現の自由や生徒の自己決定権を侵害しているのではないかと感じている。また、校則を変えることがなかなかできない学校文化は子どもの権利条約の意見表明権を認めていないのではないかと考えている。

Sとの関係を今回は中心に書いたが、つい先日教員同士でこんなやりとりがあつた。私の担当している選択教科の「現代社会」でプロジェクト学習に取り組み始めたのだが、ある班が課題を「校則問題」と設定し、目標を「生活指導部の先生と話し合う」と設定した。私は生活指導部の主任に「今は調べたり、情報収集をしている段階なのですが、情報を整理分析し終わったらまとめを行います。その後、彼らが生活指導部の先生と話し合う機会を設けていただけますか？」と交渉しに行った。すると生活指導部主任は苦い顔をし「いや一他の生徒の影響を考えると出来ないですね」「やって意味ないと思います。」「私たち教員は広い視野

で物事をみて校則を決めていますけど、彼らは自分の欲望だけでしょ」と校則の正当性を私に説明してきた。私は「校則の合理性を彼らがインタビューするのでその時に説明してもらえますか？」と聞くと「いややって意味あるのかな」とやりたくなさそうであった。「では今私にしてきた説明を彼らにしますね」というと「それはそれでちょっとうーんどうかな。」と言ってきた。さらに生活指導主任は「彼らはこの学校を選んできてますよね。校則も入学する前からオープンにして説明しているし、嫌なら他の学校に行けばよかったですよね。今は校則のない学校もあるんだし、通信制とかいろんな学校も選べるんだし」と言ってきた。私は、校則の是非を今この場でこの主任と話す場ではないなと感じたのでとにかく生徒と話し合いの場を持ってもらえるのかももらえないのかを迫ったが、「話し合うといっても何を話したいのかわからない」と言われたので、「もう少し授業で話し合いの焦点を明確にしてからまた来ますね」と言って終わった。

この日の帰り道、私はモヤモヤがとまらなかったが、一番腑に落ちなかったのは「選んできている。嫌なら他の学校を受ければよかった」という点だった。これは今まで選ぶ機会が多かった人側の意見なんだと思う。確かに制度的には学校を選べるが、実質的には選べずにここに来ている生徒が多いのではないかと私は考えている。

私個人の話になるが、私はあるマイノリティに属している。しかし、日本ではまだまだ制度が整っておらず差別を感じたり、不公平であると感じることが多い。そして声を上げると世間からよくこういわれる。「日本が嫌だったら出ていけ。英語でも話せるようになって外国で暮らせばいい。それが出来ないのは自分のせいなんだから日本の制度を受け容れろ」と。この言葉は悔しくて排除された気分になり無気力にもなり絶望にもなる。だから生活指導主任が生徒に対してそう思っていることが、夕飯がのどに通らないくらい悔しかった。

また、選んで来たとしてもおかしいと思ったなら声を上げ変えることが出来る制度が学校に整っていないとおかしい。民主的でないと感じる。しかし、生徒が校則を変えられることが出来る制度を整えることはおかしいと考える教員は多い。勤務校は生活主任のような考えを持つ先生が圧倒的に多数派で、私は少数派である。今回は書かなかったが自分のクラスの生徒でマスクの下に鼻ピアスをしている生徒がおり、そのことで体育の授業の平常点が減点されており「1をつけるぞ」と脅されていたという件があった。この時、私は校長に抗議に行ったが「外させるように俺だったら指導するね」と言われて終わった。私は現場で教員と思うように対話ができていないし、そのようなスキルもまだまだ身につけられていない。自分の意見表明もしっかりできていない。

今後の自分の課題はリスクがあっても声をあげること、半径 2 メートル以内の対話から広げていくこと、生徒に希望を示すことができるようになることだと思っている。